

釧路水試だより



9

巻 頭 言 場 長 福原 暁

昭和42年度実施計画の概要

普及員だより

普及活動の一年を顧みて

浜中地区水産改良普及員 安任芳雄

解 説

ババカレイの標識放流結果について

シシャモ種魚の飼育について

冷凍魚のとかし方

卵を保育中のヤナギダコ

今年の子ケ・マス漁について

豆 知 識

昭和42年6月

北海道立釧路水産試験場

巻頭言

北海道立釧路水産試験場長
福原 暁

道東の海も初夏の日さしに輝き、魚揚げ場は銀鱗に埋まつて、釧路は今サケ、マス漁の最盛期です。今年には沖合海域にかつてないベニサケの厚群が回遊し、白サケも好漁、現在西寄りの海域でカラフトマスが漁たけなわで、釧路水試の予報がほほ適中した感を深くしております。

今年はこのように四十八度以南のサケ、マス漁始まつて以来の豊漁で、業界のためまことに欣快に耐えませんが、それにも増して特にカラフトマス資源の回復徴候が認められることは、今後の日ソ漁業交渉に有利な材料と言はなければなりません。

さて、私はこのたび計らずも釧路水試の場長を拝命しましたが、現下の道東における水産事情に鑑み、その責務の重大さを痛感しております。

近年、吾が国の水産業は周知のとおり流動が極めて激しいので、産業研究機関である水試は少なくとも十年くらい先の先見性をもつて調査研究に精励しなければ、業界に対して真に役立つ指導や助言は出を得ないと考えております。

近年、道東の底魚資源は遺憾ながら減少の方向にありますので、今後深海漁場の開発が急務であると思います。また、道東の沖合海域にはサンマ、サバ、スルメイカ等の浮魚資源が極めて豊富に回遊していることが吾々の予備調査から推察され、これ等の諸資源は近

々国際漁業化することが予想されますので、當場としては是非新鋭調査船を建造し、これ等の資源調査を積極的に行つて新漁場を開発し、本道漁船団を先達誘導しなければならぬと考えております。

最近、北転船の努力数増大によりましてスケトウダラの漁獲量は急増し、あまつさえ大手水産会社の洋上スリ身の進出等によつて近海産のスケトウダラは経済的に大きな打撃を受けつつありますので、全道五水試の加工部門の技術を結集し、スケトウダラの付加価値を高める新製品の開発を早急に計らなければならぬと考えております。

また、道東地域には多くの湾、入江、およびかん水湖沼があつて、道内の他地域に比較し養殖漁場として開発可能な地理的条件を豊富に具備しておりますので、これ等を可能な処から開発して行かなければならぬと同時に、本地域特産のエビ、カニ、ホツキ貝等の人工養殖技術を確立するための、研究を意欲的に実施する必要があると考えております。

このように、道東地域は本道でもすこぶる夢の多い有望な地域と言えますので、今後これ等の夢を現実のものにするため釧路水試の総力を上げて努力をし、水産業の発展に寄与したいと考えておりますので、今後共皆様のご支援と、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

昭和四十二年度実施計画の概要

漁業資源部

一、沖合漁業資源及び漁場に関する調査研究

(一) サンマ漁場調査

北上期のサンマ及び北方沖合海域に分布する未利用サンマ資源に重点をおいて、その分布、生態的特性を明らかにしながら一般的漁業指導を実施します。

(イ) 時期 自七月上旬 至十一月下旬

(ロ) 場所 中南部千島より三陸にわたる

東経一七〇度までの太平洋海域

(ハ) 調査船 光洋丸

(二) サケ、マス漁場調査

四十八度以南海域に分布するサケ、マス資源の系統群毎の分布、魚群行動を明らかにすると共に漁業による損傷、減耗の事態を明らかにして行きます。又一般的漁業指導を行います。

(イ) 時刻 自四月上旬 至八月中旬

(ロ) 場所 北緯四十八度以南の流網操業許可海域

(ハ) 調査船 光洋丸

(三) 漁海況予報調査

サケ、マス、サンマ、サバ、スルメイカニシンの種を対象に、漁況と海況の関連性を追求して、漁海況の予報を行います。

二、沿岸漁業資源及び漁場調査研究

(一) 沿岸漁業資源調査並びに漁業経営試験、

道東沿岸漁業の重要種である、ババカレイ、ソウハチカレイ、シシヤモ、ヤナギダコについて生態を明らかにしながら資源評価を行います。一方十勝地方において、ソウハチカレイ、ヌイメガジの企業化試験を行ない未利用資源の開発と漁業指導を行ないます。

(イ) 時期 海上調査自五月 至十月中旬

陸上調査 周年

(ロ) 場所 十勝、釧路、根室支庁管内

(ハ) 調査船 海幸丸

(二) 底魚資源調査

沿岸資源調査との関連で、スケトウダラの産卵群、及びババカレイの生態研究を行ない資源の動行を調査します。

(イ) 時期 海上調査自四月 至三月(六月を除く)

海上調査 周年

(ロ) 場所 襟裳以東海域

(ハ) 調査船 第八釧漁丸

(三) ニシン調査

産卵前、回遊期から接岸期、産卵期について、生物学的調査を行い、来遊群の性状を明らかにして行く一方、聞取りや水揚地の調査から漁況の報導を行ないます。

(四) エビ漁場調査

生態的研究では、産卵期ふ出期の親エビの質や分布密度に重点をおいて、資源状態の把握にあたります。一方委託試験船第八琴平丸により、厚岸、広尾沖合のエビ漁場の探索を行ないます。

(五) ケガニ資源調査

ケガニの生態研究に重点を置いて調査を行ない、資源動向を適格にとらえて行きます。又標識放流を行なつて、群行動を明らかにし、稚仔の棲息場所を明らかにし、この出現量から資源の予測が出来るように研究を進めます。

増殖部

◎ 具類増殖試験

昨年に引き続き浜中、釧路を中心にして、

浮遊、底棲稚魚、若令貝を対象とした調査、移殖貝の効果調査を行ないます。特に今年は浜中において浮遊ラーバーや底棲稚魚が、どうして、一定の場所に多く出現するのかを、潮流を一つの目安として具体的につきとめる作業をはじめます。また砂の粒度や動きなどとの関連も合せて調査する必要があると考えています。

◎コンブ類の増殖試験

釧路の試験区ではナガコンブ若2年群（四月以降発生群で三年目に漁獲対象になるコンブ）の発芽期をブロック投入によつて調べます。この調査が完了すれば、ナガコンブの生活史が一応明らかになりますので、次の問題に取り組み準備的段階として、漁場内における資源的を調査についても取り組む予定です。また厚岸、浜中、歯舞などのコンブについても今までの調査結果があらはまるかどうか調べて行きます。

◎構造改善事業効果調査

根室漁協のワカメ養殖沖合保全施設が今年度設置されますので、従来の養殖指導調査と合せて、その効果を三ヶ年計画で調査します。この調査は国の指定によるもので北大水産学部との共同で行ないます。

◎大型魚礁効果調査

今年度から国の指定を受け、三ヶ年計画で魚礁と餌料生物を中心課題とした調査に入ります。今年度はとりあえず漁獲された魚の胃の内容物を重点的に調べます。

◎漁場改良造成（コンクリートブロック）効果調査

昨年に引き続き浜中の試験ブロック（台型三角錐型、改良円筒型、鉄製ブロック）について基本的調査を行ないます。また根室市歯舞においては着生コンブの再生産機構について追求し、ブロック漁場が長い間にどのような変化して行くかを調べます。また天然礁との比較をするため、地先天然漁場の実態についてもできるだけ広く調査の予定です。

◎水質汚濁防止対策調査

水質調査はベカンベウシ川、音別川、尺別川を、漁業被害調査は霧多布浅海域を道の指定によつて行ないます。その他工場、パトロールも従来通り行ないます。

◎海藻類養殖事業調査

浜中町（ワカメ）、根室市、羅臼町（コンブ）に道から養殖試験事業が委託されていますので、それぞれについて調査指導を行ないます。

以上が増殖部の予算による事業ですが、この外に、現在予算要求中の甲殻類の幼稚仔飼

育技術試験やシヤマの人工ふ化飼育研究などが計画実施されます。さらに現地から要望のある海藻類、貝類、ウニ調査などが山積しています。

加工部

I 加工技術試験

1. 乾燥に関する試験

(1) 水産物を乾すのには温度、風力、湿度に異なることが多いので温度の高低、風の強弱、湿度の高低がどの様に乾燥速度や水産物に影響するかなど調査をします。

(2) 水産物の種類、形態と乾燥の関係（水分の表面移）について調査をします。

以上は機械にする乾燥を主として行います。

2. 冷凍冷蔵に関する試験

煮干品の冷凍変性の関連についてサバ節の半干製品を冷凍貯蔵すると、製品の含水量により、遊離水（ドリツブ）の量が増減し、製品の肉質状態が変化します。その状態を調査します。

3. 指導に関する試験

実地指導など要請のある加工技術の予備的を製造試験を行います。

サバ背開燻製の製造試験

小型のサバを対象とします

Ⅱ新製品開発試験

(1)コンブ利用化試験

ナガコンブの軟い特質を利用し、コンブの成熟度別に抄きノリの様を製造試験を行います。

成熟度の細切の関係 乾燥と収縮

製品の品評

(2)魚卵製品

スケソウ水子、タラ卵、コマイ卵など低利用卵に無水物を添加、又は脱水して水分

『普及員だより』

普及活動の一年を顧みて

浜中地区水産改良普及員

安 住 芳 雄

昨年七月、水産業改良普及員を拝命、十余年務めた水産物検査員生活にピリオドをうち、水産業改良普及業務に従事することになりました。動機につきましては、明確な答えはできませんが、少なくとも普及活動という仕事に深い興味をもっていたことはたしかです。したがって、普及活動の重要性につきましてはよく理解し、そのむずかしさについても充

含有量を少なくして凝固を計り薄塩の塩製品の加工試験を行います。

添加物の検索、添加物の添加量の調査
脱水方法の検討、製造法の検討

Ⅲその他

昭和四十年から続けて来たコンブ機械乾燥試験を今年も浜中町で実施します。

今年コンブの乾燥を機械化する時に必要を資料を得るため次のような調査、試験を進めたいと考えています。

一、実施調査

(イ)コンブ漁家の点在調査

(ロ)コンブ採取量の階別組成調査

(ハ)コンブの性状と製品位についての調査

二、操業調査

(ニ)天日乾燥状況調査

(ホ)機械乾燥状況調査

三、乾燥試験

分承知していたつもりでしたが、実際に仕事を始めてみますと、その内容の限らない広さ、底の知れない深さにビックリしました。と同時に、その責任の重大さについても痛感させられた次第です。このようなわけで、この一年間無我夢中であつたというのが本音で、改良普及業務をやつてきたというよりむしろ漁業者からいろいろ学んできたという言葉が

その中で、昨年、浜中漁協青壮年部とタイアップして、浜中町沿岸漁業の主体をなしているコンブ漁業について、その実態把握と基礎的資料を得るため「コンブ漁業の問題点と今後のあり方」というテーマにもとづいて仕事をしたのが強く印象に残ります。これは、道東沿岸のコンブ採取時期である夏期の気象条件がどのような影響を沿岸漁家経営に与えているのだろうかということから始まり、これをさらに掘り下げていきますと、労働力の問題、漁業後継者の問題、漁業経営の多角化の問題、さらには日常生活に関する問題にまで発展し、あまりの問題の大きさに終始がつかなくなつてしまつたことがあります。

これからの方向としましては、これらの問題点を中心に、水試、町、漁協と連携し、綿密な連絡をとりながら解決の道を開いていきたいと考えております。これには、何んといつても漁業者の積極的な態度を必要としますので、御協力をおねがいします。「普及所」は別名「不休員」である、漁業者と一体となつて日夜を分かず、沿岸漁業の振興発展に努力していきたいと考えております。

人事移動

去る五月二十九日付をもつて、十八年間もの永い間、道東水産業の発展のため、活躍された桜井場長が後進に道をゆずり、今後は特別研究員として、試験研究の指導に重点を置いて、活躍される事になりました。後任には、福原漁業資源部長が昇格され、サンマ研究の第一人者としての経歴と、三年間の漁業資源部長としての経験を生かされ、今後の道東漁業発展のため活躍されることになりました。

なほ、漁業資源部長には、中央水試からサンマ研究、沿岸資源研究のベテラン内藤科長が発令されました。

ババガレイの標識放流結果について

漁業資源部資源科

ババカレイは、道東の沖合底曳網漁業や、沿岸刺網漁業の重要な資源として知られておりますが、特に沿岸漁業にとつては年々漁獲が増大し昭和三十二年釧路で当初十五隻によつて始められたババカレイ刺網漁業も十年目をむかえ、隻数も百隻をこすようになり沖合底曳網のものと同様に資源が近年では、沖合底曳網の漁獲にせまり、四十一年はついに沖合底曳網での漁獲を上廻りました。これは底曳網の禁止区域拡大の影響も考えられますが、沿岸刺網の隻数の増大、努力量の増加によつて、沿岸えの配分が高められた結果といえます。釧路で水揚げされた両漁業の年別漁獲量を第一図に示しました。

六〇〇米までの比較的広い深度帯に作られ、夏は浅く一〇〇米から一五〇米位、冬は三五〇米から六〇〇米位の所に分布します。漁期は十一月から一月までが主で、これは産卵のため密集する群が対象になつています。しかし産卵場については、はつきりしておらず現在は次の様に考えられています。

(一) 釧路沖海谷部周辺通称雪裡付近に産卵場をもつ群がある。

(二) 産卵期になると南下移動して、東北海域に産卵場をもつ群がある。

ですから釧路海域でとれるババカレイは、この二つの群がまざつてとれているのではないかと推察されます。それで四十一年度はこの事をたしかめるため次のように標識放流を行いました。時期は十一月八日、沖合底曳委託試験船第八釧漁丸を使用して、海谷部の西側水深八五米から一〇〇米でとれた、体長二十五種以上の産卵前期のものについて、第二図

この重要な資源について、当水試も「沿岸漁業資源調査」及び「底魚資源調査」の事業で重要種として研究を進めておりますが、分布は、三陸沖から南千島までの太平洋岸に主に棲み、そのほかオホツク海にも若干みられます。襟裳以東海域では、水深一〇〇米から

のような、ビニール製スバゲティチューブに

シシヤモ稚魚の飼育について

増殖部 尾身 東 美

一、はじめに

シシヤモがサケなどと同じ様に普段は海で生活し、成長成熟すると川に入り、そこで産卵すること、産卵された卵は砂などに付着し川で生活し、ふ出後、海に帰ることは皆様もよく知つていると思います。釧路を始め道東各地ではかなり以前から人工採卵によるシシヤモ資源の保護が行なわれて来ました。これは川に昇つた親魚から人工的に採卵し、卵を独特のふ化器に収容し、翌春自然にふ出して海に帰るのを待つ訳です。ところが近年もつと積極的に増やすこと、例えば餌を与え大きくして放流したり、あるいは親になるまで人工的に飼育ができないものかと云つた要望が水試に持ち込まれるようになりました。当水試でも従来からこの種の試みは行われて来ました。片手間にできると云う簡単な問題でなく未解決となつておりました。しかし、

既に沿岸資源の荒廃した本州方面では獲る漁業から作る漁業のスローガンのもとにいろいろな魚類の養殖が試みられ、ある種のものでは成功を収めています。私たちとしても資源の豊富な道東だからと云つて安閑としておれない訳です。それで、まず技術的面だけでも解決して置かなければと、昨年新釧路川で採卵したものを使用し、飼育の予備実験を始めました。詳しくは項を改めて書きますが、現在、最も長く生きているものでふ出後約90日、大きさ約15mmです。それでは市販の大きさにするのは大変なことだと誰でも考えることでしょう。正にその通り、ふ出時が約8mmですから思つた程大きくならないものです。たゞひ弱な状態で海に出さず多少餌づけをして海に放流する目的は達せられるかも知れません。しかし獲れるだけ、いるだ

け獲ると云つた漁業が続くならば道東の資源として本州のそれと同じ方向に進まざるを得ない訳で、いなくなつた時は試験場にたのめば、資源の回復が簡単にできると云つた安易な考えが皆様の中にあるとすればこれは大変な間違いなのです。その様な意味も含めてこの種の研究が皆様自身に資源の重要性を知つてもらふものとなり安定した漁業経営の礎となれば幸いです。

二、稚魚の餌づけ

シシヤモ稚魚に餌を食べさせようとする試みは従来種々と計画、実施されましたがなかなか思う様に行かず途中で失敗して来ました。それで私達の計画でもまず第一になんでもよいかから稚魚の消化器に餌を入れること、第二に出来るだけ長く飼うことを目標に実験を始めました。

昨年11月20日 新釧路川で採卵したふ化盆10枚を当水試の水槽中で管理し、ふ出を待つたところ、2月12日 最初のものがふ化しました。ふ化直後の稚魚は全長8mm内外、口の大きさは約0.3mm、体の割に口の小さいのが特長です。それで第一目的を達するには餌が0.3mmより小さい必要があります。種々調べたところ、米国ユタ州産アルテミア（エビの一種）

冷凍魚のとかし方

加工部 三 村 英 一

のふ化直後のものがよいらしいと判り、これを与えてみました。そうしますとふ化後4、5日目のものの腸の部分にあの赤い特長のあるアルテミアが透けて見えるではありませんか、偶然入つたのではと気を落ち着けて操り返したところ、やはり入るのです。これで第一の目標は達成できました。次に第二の問題になる訳で、はたしてアルテミアが栄養価があるのか？これを確める方法は食べさせ得る餌が一種しかない現在比較のしようがなく、何時まで生き永らえ得るかで知るより仕方ありません。しかし淡水中で飼つたものはある期間(約40日)以上どうしても生かすことができないのです。ところがある期間淡水で飼い海水に移したものは少数ながら95日(6月12日現在)も生き続けましたので第二の問題についても、ある程度の目安がつかまりました。たゞ大きさを見ると95日目で15mm内外で、思つた程大きくなりません。天然の状態が知られていないので何とも云えませんが、餌の与え方その他、種々のことが考えられます。それで今後この問題を明らかにする予定です。

以上この項終

(つづく)

夏枯れといわれる時期で魚は冷蔵品を利用することが多くなります。

冷凍魚は一般に大量にとれたシユンの魚です。それが不味と言われるのはとかし方の上手下手によるところもあり、このとかし方について調べて見ましよう。

各家庭でとかす方法を大別してその長所短所を考えて見ましよう。

低温解凍 (零度近くで自然にとかす)

常温解凍 (自然室温でとかす)

水漬解凍 (水につけてとかす)

(直接法、間接法)

加熱解凍 (急に熱を加えてとかす)

(煮る。焼く。蒸す。油揚)

一、低温解凍

冷凍品は普通零下二〇度以下ですから電気冷蔵庫の貯蔵室は零度前後ですから自然に軟かになり、魚の栄養分が肉に吸収されるので風味が落ちにくいのです。この方法

は解凍に時間がかかるので急揭の時は不適当です。

二、常温解凍

この方法は季節、温度や風などに解ける早さがちがひ、夏では早くとけ、肉質に栄養分の吸収されることが少ないので温度の低い風の当らぬ所を撰んで下さい。

三、水漬解凍

水の中に漬け込みますから魚体全面から解かしますから早く特に流水ですと水温の低下がないので急ぎの時にはこの方法が良いわけです。しかし水の中は栄養分が流れ出し又肉質に水が含まれるので風味が落ちます。これを防ぐためビニールなどに包むと良いわけです。

四、加熱解凍

冷凍食品やフィッシュステイックなど調理した加工品に多く行はれています。この方法は表面の肉質が固まり味は落ちにくい

ですが中央の肉に熱が重うぬうちに表面がこげたり又表面の肉が縮み中央の肉が生肉のため多いので表面に割れ目や白い成分が浮き出して外観を損じます。この方法は小型で熱の通りやすいものに良いと思います。

以上の様に一長一短がありますが一般家庭では自然解凍をして包丁が入りやすくかつた半解凍の時に、調理すると栄養分の損失も少なく風味も落ちず外観も良いわけですから一番適した方法と思います。

その他四つの方法を組合せることは勿論良いわけです。

◇お知らせ◇

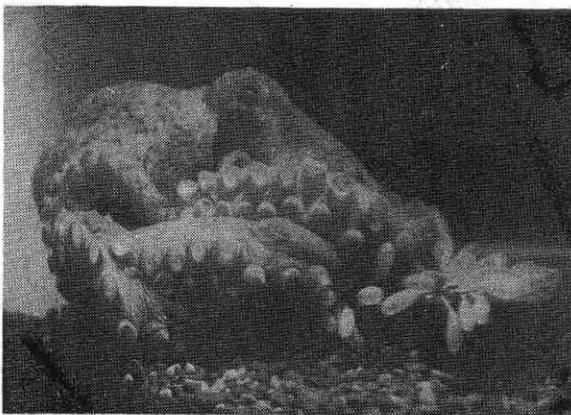
今年度は本誌の編集や御世話を漁業資源部で担当します。出来るだけ読みやすく、又何か一つでもよいからよんでためになつた……というふうに編集したいと思っております。漁業者の皆さんも、こうしたらいい、こんな事が知りたいといったようなご意見をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております。

卵を保育中の ヤナギダコ



漁業資源部

坂本寿勝



一般にタコ類は高度の産卵生態をもっており、ヤナギダコ(小ダコ)は七〇〇個から千個位の卵を海底の沈木や、古箱等にうみつけます。十月～十二月頃まで交尾を終つて、三～四月頃に卵をうみまします。

交尾した雄(シオダコ)はそのまゝ深みに移動して死んでしましますが、雌(マダコ)は浅みに来て卵を生み、子供がかえるまで写真のようにそばについていて、シオフキで水流をおこしたり、卵についたゴミを吸盤できれいにしたり、外敵から卵をまもつたりしています。タコのスタイルは悪く、外国では「悪魔の魚」といわれてきらわれておりますが、どうしてどうして、立派な母性愛をもつた動物です。飼育実験では、この親だこは五日位で死にましたが、卵はふ化まぎわまで生きており卵の中で子供がスミをふくままでになりましたが、卵膜をやぶつて出て来る事はできませんでした。親がそばにいて何かのしげきでふ出するようです。自然海では、このように生まれてくる子供をたのしみに親だこが一生懸命保育していますので、資源保護のためにもみんな、保育中の親ダコは大事にしたいと思ひます。

今年のサケ・マス漁について

漁業資源部

漁業科

今年の四八度以南サケ、マス漁は、漁期前の予想では、カラフトマスは豊漁年に当り、昭和四〇年並みの漁獲が期待され、一部の海域では上廻ることも考えられた。シロザケは平年並み、もしくはややよく、海流次第ではかなりの豊漁となるであろう。ギンザケも豊漁年としての傾向をもち、漁獲量としても相当期待できる。ベニザケは、東方沖合海域が冷水化しているかどうかによつて漁獲の対象期間が短期間に終るか、長期間にわたるかきまるだろうと発表されました。

漁期前の四月十日より当水試所属の光洋丸を含めた委託調査船一隻によつて、現在もなお調査を続けております。現在までに得られた結果より経過をみてみますと、

漁期前の調査によると、本道近海の東経一四八度より西側は、冷水帯におゝわれて、サケ、マス魚群の来遊はほとんどみられなかつ

たのですが、その東側の北緯四一度、東経一四九度を中心としたあまり広くない海域で、流網にはシロザケ反当り六尾程度、はえなわでは鉢当りカラフトマス五〜一三尾、シロザケ二〜三尾とよい漁獲がみられました。また東経一五〇度より一五五度の海域では、北緯四二度、東経一五二度を中心として、シロザケを反当り二〜三尾、はえなわでは鉢当りシロザケ一〜四尾、カラフトマス一〜七尾と、はえなわに好、不漁の波がみられました。東経一五五度から一六〇度の海域では、シロザケが反当り一〜二尾と他の海域よりうすいが、はえなわではカラフトマスが鉢当り四〜七尾と比較的好漁がみられました。それより東方沖合海域では、例年より水温は低目であり、ベニザケの好漁が期待される状況を示していました。

豊漁年にあたるカラフトマスは、全海域と

も魚体は小さく、小さな目合の網による調査によると厚い分布が見られ、はえなわ船の好漁が予側されました。

一般漁船の解禁当初は小型船は前記の北緯四一度、東経一四九度付近の海域が主漁場になつたようですが、あまり長続きせず、沖合出漁を余儀なくされています。

東経一五〇度から一五五度にかけての海域には一部の流網船を除いて殆ど漁船が殺到し、流網ではシロザケが殆んど極めて厚く、はえなわではシロザケ、カラフトマスともに好漁を不していました。しかし、潮目が強いため好漁場は南北に狭く、北緯四一度の東経一五〇度から北東方向に一線になつて形成され、船毎の差は大きかつたようです。

東経一六五度以上の沖合海域には例年より多くの流網大型船が出漁したようで、この海域は前述のとおり水温が低目であつたことも幸してベニザケ、シロザケともに例年より厚い群が広範囲に、しかもあまりムラもなく見られ、非常に良い漁をしていました。その後、この海域に移動する流網船が増加しだし、5月中旬以降は大半の流網船が北緯四四度〜四五度、東経一六〇度〜一七〇度の海域に集中して操業しています。六月に入るとベニザケの漁獲は低下してきましたが、カラフトマス

の漁獲が多くなり、引続き好漁場となつています。

一方、はえなわ船はカラフトマスがいつもの豊漁年並の漁があつた上に、シロザケが例年にない程の好漁であつたため、初漁期は非常に良かったが、しだいにシロザケの漁獲は落ちていきます。しかし、6月に入つてもカラフトマスの漁獲は落ちず、北緯四三度〜四四度、東経一五三度〜一五八度の海域で依然好漁を続けています。

近年サケマス漁船の遭難が多くなつて来ており、今年も先日来の時化で多くの漁船が遭難し、多数の尊い命が失なわれております。原因は種々様々でしょうが、充分に海難に氣をつけて操業していただきたいと思ひます。

▲ 豆 知 識

六月の声をきくようになりますと、郊外でのレジャーが盛んになります。その一つに近年ブームをよんでいる「釣」があります。近頃水試にも、このブームを反映してか魚について色々と問合せがあります。その中で一番多いのが「ヤマベ」についてです。例えば「ヤマベは雄しかつれないが雌はいないのか」「二時間以上かかつて、一尺五寸位のヤマベを釣りあげたがヤマベの王様か」といつた具合です。そこでヤマベについて、北大水産学部的小林喜雄先生の書かれた「北海道の淡水魚」から引用してのべてみます。

ヤマベは、今北洋や四八度以南海域でとれているサケ、マスの仲間で、学名をオンコリンカス・マズンといい、和名ではサクラマス（マス又はホンマス）といつている魚の幼魚及びその雌型を「ヤマベ」又は「ヤマメ」とよんでいます。ですから他のサケ属の仲間と同じように河川にのぼつて、卵を生みます。ただサケ属とはちがつて、ふ化した稚魚は春先にそのまゝ海に降るのではなくて、河に留つて習年の春迄、二冬を河の中で生活して、始めて海に降ると云う性質をもつています。ですから春先に銀毛ヤマベといつているのが降

海型で、これが海に出て、海洋生活を二〜三年おくり、サクラマスとして再び産卵のため河にのぼつて来ます。先ほどの一尺五寸の王様はこのサクラマスを釣つた事になります。

一方河川で幼魚の生活を送つている時、自然の条件や、人為的条件で、海に降る事をさまたげられたり、その必要性を失わされて河川で一生を送るものを陸封型のヤマベといつております。北方にはむしろ降海型の方が多いいようです。又雄が多くみられるのは、雄の方が雌よりも若い時に成熟しますので、河川生活中にたまたま成熟してしまつて、索餌や成長のため降海しないようになりまますので北海道のヤマベは、特にサクラマスの幼魚が河に留つた型が多く、雄しかつれないような現象がみられるようです。

釧路水試だより 第9号

発行月日 昭和42年6月

編集発行人 福原 暁

発行所 道立釧路水産試験場

印刷所 釧路市浜町十六

印刷所 釧路綜合印刷株式会社